

アフリカ文学と Oral Literature (10)

— 変質する詩学 —

赤 岩 隆

【要旨】 前回に続き、南アフリカの小説家サラ・ガートルード・ミリンについて、その前期以降の諸作品に触れながら、前稿においてすでに明らかになっている彼女の小説手法が、とりわけ政治との関係からいかに変質を遂げ、また、その結果として、oral literature との間柄がどうなったか、時間軸に沿いながら考察してゆく。

1

『神の継子たち』によって成功を収め、一躍（とりわけアメリカにおいて）有名人となったサラ・ガートルード・ミリンの、その後の長い作家人生はどうなったか。1924年、話はまだしも始まったばかりであり、じっさい、ミリンは、この先40数年の時間を生きつつ、10を超す長篇小説、伝記・自伝その他多数を残すことになる。同時に、それら多年に亘る歳月は、南アフリカという国がイギリスによる植民地支配を脱し、悲願を達成して共和国になる（1961年）歳月に相当する。それに対して、生来いわゆるメジャー志向が強く、また『神の継子たち』の成功にいわば味をしめた恰好のミリンは、政治の世界にむしろ積極的に関与してゆくことになる。政治と文学の問題は、ミリンの場合に限らず、重要かつ複雑微妙な側面を孕んでおり、事実、これとのあいだにいかにバランスを取るかその結果次第で、作家としての価値を高めることにもなれば、逆にそれを甚だしく貶めることにもなる。この点ミリンはどうだったのか。あるいは、それと oral literature との関係は、どのようなものと認められるか。それらを明らかにすることが本稿のとりあえずの目標である。

ミリンに潜在する政治的傾向の最初の具体的発露となったのは、『神の継子たち』の2年後に書かれたノン・フィクション『南アフリカ人』（*The South Africans*, 1926）においてだった。この南アフリカ論のなかには、彼女が南アフリカについて知っているすべてが描き込まれている。出版当初より、その科学的客観性の欠如が批評家たちによって指摘されたが、彼女自身はそうした批判をものともしなかった。もっといえば、そもそもなにゆえそのように批判されねばならぬのか理解できなかった。彼女に云わせれば、『南アフリカ人』は、隅々まで自身の経験に基づいたものにほかならず、とするなら、そのどこを取って客観性に欠けるなどと言うことができるのか。まったくの理解不能である。すなわち、ここにおいて露わとなっているのは、あまりにも重要な別れ道だということである。いっぽうは、蓄積されたデータに依拠し、あるいは、第三者による追試をつねに保証せよとする科学の道であり、それに対して、他方は、どこまでも個々の目撃証言を絶対的な客観として受け入れよとする態度にほかならないからである。両者を比べ、それらは根本的に次元を異にするといえればそれまでだが、当然のように、両者はけっして歩み寄ることなく、貶し合いを飽きずに続けることになる。

まさに不幸の始まりと云えるが、ここに示された断絶こそは、のちのアパルトヘイトを成り

立たせる基盤のひとつとなるものでもある。それが証拠に、『南アフリカ人』は、イギリスやアメリカの批評家の受けは芳しくなかったが、作者と経験を同じくする南アフリカ国内の読者からは、多大な賛同を以て迎えられた。作者にすれば、喜ばしいことにも、小説によっては成し遂げられなかった望み、すなわち、どこよりもまず南アフリカにおいて受け入れられたいとする望みを、この企画によって図らずも達成できたわけだが、同時に、この経験は、ミリンにひとりの南アフリカ人として進むべき方向を確固として提示することにもなった。ゆえに、以後筆を執り公的発言を行なうミリンに迷いはなくなる。ようするに、いわばこのときに、サラ・ガートルード・ミリンという作家は真に誕生したとも云えるわけだが、事実ミリンは、それを証明するかのように、このノン・フィクションに対しては、並々ならぬ愛着を示し、1934年と51年の二度にわたって改訂を加えている（二度めのときにはタイトルを『南アフリカの人びと』（*The People of South Africa*）と変えている）。

2

かくて南アフリカ国内において、望む公的発言権を得たサラ・ガートルード・ミリンだったが、同時にそれに見合う知己を国内外に着実に拡げてもゆく。なかでも、ふたりの政治家との親密な関係は、作家＝公的発言者としての彼女の立場をより強固なものとする役割を果たしたという意味で、特に重要だった。その政治家とは、すなわち、ヤン・クリスティアン・スマッツ（1870-1950）とヤン・ヘンドリック・ホフマイヤー（1894-1948）のふたりである。前者は、云わずと知れた政界の大立者のひとりであり、後者は将来首相にと囑望された秀才だったが、そうした結託の有り様を実地に証明するかのように、『南アフリカ人』の10年後、（いうまでもなく一種のオマージュとして）、ミリンは前者の伝記を出版することになる（*General Smuts*, 1936）。

が、ミリンの場合、これで話が終わるわけではない。というのも、厄介なことにも、前回紹介したように、彼女はユダヤ移民だったからである。この事実が、彼女の立場をより複雑微妙なものにする。ミリンは自身を捉えて、南アフリカ人であるまえにあくまでもひとりのユダヤ人と見做そうとしたからである。ゆえに、この一点において意見や主張が異なれば、どんな友人が相手であろうとも、あるいは、たとえそれがスマッツのような自身にとって大切な人間であったとしても、けっして譲歩しようとはしなかった。承知のように、時はナチス・ドイツが着々と政権に近づきつつあった時代であり、それに対してミリンは、もちろん反差別を声高に唱えるのだが、同時に、いっぽうにおいては、たとえば『南アフリカ人』の内容が示すように、平気で反黒人という差別の姿勢を貫き通そうとする。とんでもない自己撞着だが、彼女に云わせれば、そのようにみえるのは、事を他者＝部外者の目でみるからにはほかならない。当事者にすれば、両方をいっぺんに実現させてどこも悪いことはない。ミリン＝ユダヤ人は、南アフリカにおいてもヨーロッパにおいても、間違いなく少数者であり、この少数者＝弱者の論理が、そうした我が儘を正当なものとしてどこまでも保証する。ましてや、先に述べたように、いわゆる科学的客観性などというものは、端から棄てる覚悟でいた。としたら、その程度の自己撞着など物の数に入ろうはずもない。

ようするに、サラ・ガートルード・ミリンの頑固さは、いわば二重に屈折していたとも云えるわけだが、とするなら、第三者はもちろん本人にとっても、容易に解きほぐせなくて当然で

ある。彼女の諸作品は、なによりそうした困難さのうえに展開された。その詳細をこれからみてゆこうと思うのだが、許された紙数には限りがあり、したがって、数多い彼女の作品のなかから今回特に取り上げることができるのは、次の三作品のみである。すなわち、1928年出版の『主来る』(The Coming of the Lord)、『混血児の王』(King of the Bastards, 1949)、『魔法の鳥』(The Wizard Bird, 1962)の三作品だが、年代順に、まずは『主来る』からである。

3

舞台はトランスヴァールの町ギデオン。その町に色々な人種から成る住民が暮らしている。アフリカーナ、イギリス人、ドイツ人、ユダヤ人、インド人、黒人。それぞれに独自の伝統や風習を抱えた者たちであり、したがって、単純に仲睦まじくというわけにはゆかないが、それでも、微妙な平衡を保ちつつ皆が平穏に暮らしている。そこに、レビ主義者(Levites)と自称する黒人の狂信者集団がやってくる。その年がはじめてではなく、すでに7年目になる。集団の規模は年々大きくなるいっぽうであり(その数2500は町の白人の人口にほぼ匹敵する)、黒人たちは町の後背の山(官有地)を不法に占拠し続ける。7年目ということは、それ自体宗教的に特別な意味を持っている。いわゆる安息の年というわけであり、それまでの6年間の信仰の褒美として、主が降臨するというのだが、結果、それら狂信者の存在は、例年以上に不気味さを増大させ、それまでにない不安を町の人々に日々与えることになる。当然のように、黒人たちの待つ主は、いつまで経っても現われず、不法占拠の期間だけがずるずると長くなってゆく。

物語は、それら狂信者及びその存在の結果蔓延する目にみえない脅威や不気味さの所為で、ギデオンの町全体が平衡を失ってゆくさまを、主要な登場人物それぞれを見舞う不幸を追いかける形で描き出してゆく。おもな登場人物は、ユダヤ人の老ネイサンとその息子サウル、イギリス人のダーデン夫妻、そして、ドイツ人のドクター・ディートヘルムの5人である。イギリスで医学の勉強をしているサウルが8年ぶりに帰国し、町で医療に携わるいっぽう、ダーデンの妻ハーミアと恋仲に落ちる。肉体関係を伴わない奇妙な恋である。夫アーノルド・ダーデンは無能の弁護士であり、黒人の狂信者集団に対抗して自警団を組織し、それを指揮することを唯一の生きがいとしているような男である。当然のように、自警団に入るようサウルは誘われるが、悩んだ末に彼はその勧誘を断わる。アーノルドと同じく落ちこぼれの医師であるディートヘルムは、連合国側で戦う息子を第一次大戦で亡くし、それでいて、そこまで南アフリカという国に尽くしているにもかかわらず、ジョハネスバーグに暮らしていた折には、敵国人であるという理由だけで診療所を暴徒に襲われた苦い経験を持っている。自身の息子と同じ戦争に従軍しながらそれを生き残り、いまや一人前の医師となって帰国した老ネイサンの息子をみるにつけ、運命の理不尽な不公平を呪わずにはいられず、土曜日ごとに続けてきた老ネイサンとのチェスも、サウルの帰国後は途絶えたままになっている。

アーノルドは、自警団の権威を以て狂信者の集団に退去を迫るが、首領のアーロンはその要求に従おうとせず、いっぽう、占拠が長引くにつれて、集団内の食糧が枯渇ははじめ、ついには、町から牛が盗まれたりするようになる。アーノルドとアーロンのやり取りは、必然的に緊張を増してゆくことになるが、そうしたなか、ディートヘルムが山の黒人たちを患者にしていることが発覚し、自警団から呼び出しを受ける。ディートヘルムはその呼び出しを無視し、結

果、自警団との関係は暴力沙汰にまで発展する。ディートヘルムは、アーノルドにより鼓膜を破られ、裁判に訴える。また、暴力沙汰が起きた際、ディートヘルムは、ハーミアとサウルの不倫の関係を口にしてアーノルドを侮辱し、その結果、ハーミアとサウルの関係も、同時になんらかの清算を迫られることになる。不毛な裁判の続くなか、ハーミアは家を出る。かくて物語はクライマックスに達し、不法占拠の狂信者たちを一挙に退治すべく軍が出動することになり、そうなれば当然出ることになる怪我人の手当てのため、サウルは黒人医師テトヤナとともに山に残るが、不幸にも流れ弾に当たって死んでしまう。老ネイサンとのあいだの運命の不公平も、これで是正された恰好のディートヘルムだったが、もちろん、だからといって、胸に巣食うもやもやが根本から晴らされるわけもなく、それどころか、新たに生まれた罪の意識だけが取り返しようになく深まってゆくことになる・・・。

物語を概観すれば、おおよそ以上のようなになる。ここでも人種間の軋轢はあからさまだが、といって、作者の筆がいずれかに偏ることはない。前回取り上げた『暗い川』や『神の継子たち』同様、その自然主義的手法は、この作品においても確固として守られている。この物語においては、ある歴史的な事件が採用されており、それが作者にとって、ここでのなによりの関心事とされている。その事件とは、ほかでもない、大挙して町を襲い人びとを不安に陥れる狂信者の集団をめぐるものなのだが、これらレビ主義者らをめぐる事件には、ある歴史上のモデルが存在している。それをこの作品において物語化しようというのだが、まずはその詳細をみておこう。

4

事件は、それが起きた地名を取って、ブルホークの虐殺（Bulhoek Massacre）と呼ばれている。1921年、イースタン・ケープのクイーンズタウンの近くにある町で起きた事件である。首謀者は、イーノック・ムギジマ（Enoch Mgijima）といい、1868年ブルホークの生まれである。ウェスレー派メソジストの家庭で、9人兄弟の末っ子に生まれたムギジマは、名門のラヴデール校に進んだ兄たちとは異なり、家の農業を手伝いながら、やがて素人説教師として名を売ようになる。1907年の4月には、狩りに出ている際、天使が彼のまえに現われて、その言葉を聞く。結果、ムギジマは、旧約に戻れと説き、独自の信者を率いるようになる。メソジストから離れ、アメリカに基盤を持つ「キリストの神と聖者の教会」（The Church of God and Saints of Christ）に加わるが、すぐにそこからも破門され、自ら「選民者たち」（Israelites）と称するようになる。

かくて過激な預言者となったムギジマは、1919年、その後の事件のもととなる世の終末を説く預言を行ない、それに従って南アフリカ全土から信者が彼のもとに集まってくる。その数3000人。官有地を不法に占拠しながら、ひたすら主の到来を待つものの、もちろん容易に預言の果たされるはずもなく、周囲の住人との関係が限度を超えて険悪化してゆく。当然のように、官憲からは執拗に退去を迫られるが、それにも頑固に従おうとせず、結果、とんでもない悲劇が起きる。排除のため実力行使に出た政府により多数の死傷者が出る。その数は、300人を超え、捕えられ裁判にかけられたムギジマは、重労働6年の刑を宣告される。

そうした事の成りゆきを、ミリンの『主来る』はほぼ正確になぞってゆくのだが、先に紹介した物語の概観からも明らかなおお、作中においてこの事件は、あくまでも物語の背景を成

すのみである。とって、それはただの背景とも異なる。というのも、作中の事件という事件は、(唯一サウルの帰郷という一事だけは除いて)、すべてこの背景によってもたらされる脅威に煽られるように、次から次へと起きるからである。すなわち、この背景がなければ、物語の一切はどうにも成り立ち得なかったことになるが、とするなら、そうした独特の作品の有り様のほうこそ、ここでは注目に値する。第一に、ほかでもない、脅威の本性とはなによりそのようなものに違いないということ。第二に、その結果、さまざまな人種を物語に登場させながら、どの人種＝登場人物にも加担することなく、作品それ自体を深めることに成功しているからである。かくて作者の自然主義的手法はここでも全うされるわけだが、そうした手法維持の様子をみれば、じっさい、見事というほかなく、単なる手法云々の次元を超えて、もっと積極的に、一種の詩学と見做してもよいほどである。それが証拠に、こののち作者が身も心もあずけてゆくことになる、より高次の黒人恐怖の姿勢だけは、物語においては偏りのない自然主義的手法に固く護られながら、それでいてよくよく反省すれば解かるとおり、きわめて主観的な偏向を施されつつ提示されている。ゆえに、登場人物それぞれの生きざまを通じて、読後もっともすんなりと読者の腑に落ちるのは、この人種(＝黒人)問題に潜在する恐ろしさということにもなる。事実、以後ミリンは、鈍感な読者相手に、問題の深刻さを可能な限り痛切に訴えかけるべく、作家としての様相を変化させてゆく。同時にそれは、芸術よりも政治を優先させる公的発言者としての針路を指し、前進と後退とが裏腹に成り立ち得るようなじつに奇妙な世界認識の成立をも意味していた。いずれにしろ、なおも1928年、依然として話はまだ始まったばかりである。

5

作品一覧を辿れば、『主来る』は『神の継子たち』以降に出た3作目に相当し、20年代にはそれに加えてあとひとつと、30年代に3作、続く40年代には、1949年の『混血児の王』のまえにわずか1作のみといった具合で、年代を重ねるごとに作品数が減少してゆく様子が手に取るように解かるが、その第一の理由は、先に述べたとおり、その間に彼女が一種公的な有名人となってゆくからである。1926年に『南アフリカ人』によって、アメリカ同様南アフリカ国内においても広く名を知られるようになったミリンだったが、もちろん世の中は甘くなく、その先をと望むには、『主来る』から5年後の伝記『セシル・ローズ』を待たなければならなかった。

この伝記執筆の仕事も、もとはといえば、『南アフリカ人』同様外から持ち込まれた話だった。アメリカを講演旅行した際、『南アフリカ人』を読んで感心したハーパー社の編集者から、ローズというアフリカ南部植民地成立の立役者の伝記を書いてみないかと誘われたのである。作者にすれば初の伝記執筆だったが、やってみるとこれが意外にもよくできた伝記となり、結果ミリンの名声は、ついにイギリスにも広まることとなる。思ってもみない才能が隠されていたというわけだが、さらに3年後には、第二弾として、以前から親交があり、とりわけローズの伝記を執筆した際関係を深くしていたスマッツの伝記に着手する。この続編の受けも悪くなく、じっさい、ほかでもないこのスマッツの伝記によって、ミリンは、公的発言者としての地位を確固としたものにするのだが、いっぽう、ヨーロッパにおいては、ナチスの活動が活発化しており、1934年にはヒトラーがついに政権を獲得する。時まさに政治の季節というわけで

あり、そうしたヨーロッパにおける動きが、公的発言者ミリンを、より現実的な意味の政治の世界へと巻き込んでゆく。

そういう仕儀となったのは、一も二もなく、ミリンがユダヤ人だったからである。同時に、その所為で、あるいは、ナチスがユダヤ人を目の敵にした所為で、ミリンはただの公的発言者ではなくなってゆく。すなわち、彼女の発言は、偏っているがゆえに正当であることを求めるといった、矛盾した異端種へと変貌してゆくわけだが、それでこそ、ミリンは真にミリンになったとも云える。外に向かつては反差別を主張し、内に向かつては逆に理不尽極まりない差別を擁護する。それでいて、微塵も論理の破綻を自覚しないのだが、といて、さすがのミリンも、一足飛びにそうした境地に達したわけではない。たとえばホフマイヤーやスマッツとの親密な交友を思えば容易に推察できるように、もともと彼女は、いわゆるリベラリズムの陣営に属していた。その穏やかさから、のちの過激な立場までの距離は、けっして大袈裟でなく、天と地ほども離れているが、ようするに、これ以後のミリンは、リベラリズムの穏健さに纏わる無力さ加減に心底失望しつつ、同時に彼女がその陣営に止まる理由になっていた3人、すなわち、ホフマイヤー、スマッツ、夫フィリップ（1952年死去）の3人が次々と世を去るに到って、一種の軛から解き放たれるような恰好で、彼女本来の道へと踏み出してゆくことになるのである。

6

1928年の『主来る』から1949年の『混血児の王』までのおよそ20年間、サラ・ガートルード・ミリンは、小説・伝記ほか、自伝・日記にまで手を染めている。たかだか20年にすぎないとも云えるが、その間に世界レベルで起きたことを思えば、呑気にただの20年間と見過ごすことのできない年月には違いない。ここで特に範囲を南アフリカに限って、その歴史をふり返ってみることは、けっして無駄ではないし、それどころか、のちのアパルトヘイト成立のことを考えるなら、きわめて意味深い20年だったと云ってよいのだが、如何せん、いまは与えられた紙数に余裕がない。よって、ここは思い切って時計を進め、次の作品『混血児の王』に進むことにしよう。

伝説の男クーンラート・デ・バイス (Coenraad De Buys (1761-1821)) の物語である。いわゆるユグノーの4代目に生まれた彼は、あらゆる支配・束縛を嫌って、生まれ故郷のケープ植民地を離れ、最初は東に、次に北の荒野へと家族を率い移り住んでゆく。のちの有名なグレート・トレックの先達というわけだが、少なくともそれに20年は先立っていた。しかも、彼の場合は、どこまでも独力でなされた。大挙してのグレート・トレックとは訳が違う。じっさい、その自主独立の精神は、それだけ取れば、じつに見上げたものであり、それゆえにこそ、一個の伝説とも象徴ともなり得たわけだが、そのようになったのには、ほかにも理由がある。ひとつは、単純にその人並み外れた長身（ゆうに2メートルを超えていたという）の所為であり、そして、もうひとつは、ずっと過激に、彼の家族がまったくの混血により成り立っていたという事情に拠る。自身は歴とした白人でありながら、何人もいた妻は、全員白人以外から選ばれた。そのように、白人よりはむしろ積極的に非白人を好む嗜好は、あまりにも大胆、無謀と云ってよいほどである。なんにしろ、桁外れの逸脱には違いない。そして、その当然の結果としての神話化というわけだが、そうした有り様を、以下において順次みてゆこう。

全 51 章の物語は、「南」と「北」の 2 部から成る。伝説の本体となるのは、もちろん、第 2 部のほうだが、『主来る』から 20 年経ったこの作品においても、作者の手法は、(曲がりなりにも「詩学」とまで呼びたいとするなら当然のように)、自然主義のそれであり、ゆえに、伝説の本体へと到る前段階の叙述にも労を惜しまない。如何ほど生来無謀とはいえ、好んで危険極まりない荒野へと移り住むはずもなく、不承不承、半分は繰り返して追い出される恰好で、北へ北へと移動していったというのが偽りのないところであり、したがって、そのさまを可能な限り忠実に辿るとしたら、そのような 2 部構成になってこそ本当である。

牛を中心に家畜を飼いながら、生活必需品を購ってゆくというのが生活の基本である。ゆえに、できるだけケープ・タウンに近いほうが望ましい。でありながら、逆に近ければ近いほど自由が利かなくなるという事情もある。それでは、好き勝手に生きてゆくことができない。同時に、ケープ・タウンから遠く離れすぎてしまえば、黒人とのあいだの軋轢が増し、牛の盗み合いを繰り返す堂々巡りに陥る。そのなかで、いわば安住の地を見つけようというわけなのだが、状況はつねに流動的であり、しがたない一個人とすれば、その煽りを喰らうばかりである。南アフリカといえば、いうまでもなくアフリカ大陸の南の端の植民地だが、はるか北の彼方の本国を襲う時代的な変化は、そんな辺境の地にも間違いなく及んでいた。とりわけ 18 世紀末から 19 世紀初めにかけてのヨーロッパは、激動の時代を迎えており、その所為で、南アフリカにおける植民地の所有権も、もともとのオランダ人の手からイギリス人の手に、ふたたびオランダ人の手に戻ったと思うや、すぐさまイギリス人の手に渡るといった具合で、そうした紆余曲折のたびごとに、デ・バイスらいわば外れ者らにとって、植民地という場所は、いよいよ耐え難いところとなり、ついには自身の首に懸賞金がかけられるまで、それとの関係は悪化してゆく。

その末の、北へ向かうという(苦渋の)決断というわけだが、これには、どうしたって消極的な影が伴う。というのも、デ・バイスらが周囲に対して返すのは、つねに「否」という応えのみだからである。もちろん、その応えの芯には、自身の理想だけはけって誰にも譲るまいとする積極的な態度が支えとしてあるのだが、それにしても、「否」は「否」に違はなく、内と外が逆転することはない。ようするに、北へ向かっての移動とは、逃走以外のなにもでもなく、そのことは、なにより作者の筆＝物語によって如実に証明されている。というのも、第 2 部において描かれているのは、悪戦苦闘しながらも荒野を切り拓いてゆくといった棄て身の姿からは程遠い、ひたすら右往左往するさまにすぎないからである。それどころか、(第 1 部とは大きく異なり)、デ・バイスが物語の前面に出てくることすら、ごく稀になってゆく。むしろ、そうなる理由の半分は、最終的に達成しなければならない神話化の準備からくるのだろうが、だとしても、それで全体的な消極性が糊塗されるわけもない。ようするに、代わりに前面に踊り出てくるもの、重要なのは、むしろそちらのほうだということになる。

7

めざすは、はるか北に流れるオレンジ川(あるいは、その向こう)である。道なき道をゆき、そこに着くのに 1 か月もかかった。文明とは金輪際手を切ったつもりだったが、目的の地にはすでに先客が 100 年以上もまえから定着していた。ホッテントットを先祖とする混血たちである。もとはといえば、ケープ・タウンやその周辺に暮らしていたのだが、デ・バイス同様、庄

迫に耐えられずそんな奥地まで逃げてきて、とりあえずの安住の地をみついていたというわけである。

先住の混血たちは複数のサブ・グループに分かれており、それについては作者によって作中手際よく紹介されている。そのうちもっとも有名なグリカ人をはじめとして、コナナ人、ナマカ人、バーゲナール人といった者たちだが、住人としては、これにブッシュマン、黒人諸部族、そして、宣教師たちが加わる。じつに多彩というほかないが、そのなかに、デ・バイスらは、文字どおり新参者として乗り込んでゆく。新参者であるからには、強くは出られず、先住者の同意を得ながら定住を目論むことになる。現状は、一面においては、川向うも含めて、いわば群雄割拠の様相を呈しており、数に劣るデ・バイスらは、それら周囲の動きに翻弄されるばかりである。ところが、作者の叙述は、主人公が巻き込まれるそうした動きよりは、むしろ前者に多く集中し、そこでみられる盛衰を労を惜しまず細々と述べてゆく。結果、先に述べたとおり、主人公らは物語から見棄てられたも同然の恰好になるのだが、では、なにゆえ前者の叙述が作者にとってそれほど重要だったのだろうか。その理由は複雑だが、ここはゆっくりと解きほぐしてみることにしよう。

ひとつには、この小説が、いわゆる歴史小説をめざしているということ。事実、主人公を筆頭にその他登場人物、あるいは、時代的な枠組み、それを通じて言及される諸事件等々、どれを取っても、歴史的事実を裏切るものはない。この点、先に論じた、同様に歴史に取材している『主来る』と比べてみても、はるかに勝っているのだが、くわえて、『主来る』における歴史は、すでにみたとおり、あくまでも物語の背景を成しながら、それでいて物語本体に決定的な脅威を与えるといった微妙な働きをしていたのに対して、『混血児の王』においては、そうした微妙さ＝回りくどさは、まったく捨象された形になっている。もちろん、それにとことん拘泥わってこそ、文学に違いないことを思えば、結果、ここにひとつの変化が起きているのではないかという疑念が生じる。しかも、この変化は、きわめて重大な変化であると予想される。というのも、そうした拘泥わりゆえに生じる手間とは、虚構を以て通常歴史的事実とされるものを超越するのに費やされる労力にほかならないからである。これを理想とせずには、じっさい、虚構それ自体の意味がなくなる。大袈裟でなく、存在意義そのものがなくなってしまう。だとしたら、ここに作家サラ・ガートルード・ミリンを評価するためのひとつの基準があると云えるだろう。同時に、この基準＝インターフェイスとは、本稿冒頭で触れた政治と文学の問題の、ミリン的体現をも意味しているはずである。

ここで、前回の議論においても世話になった、クッツェーの政治的文学論集『ホワイト・ライティング』のページをあらためて繰ってみることにしよう。そのなかでクッツェーは、ミリンの混血嫌い、外観即内実とする態度を強く非難している。なるほど、この点、『混血児の王』ほど、ぴたりと当て嵌まる作品はないと思われるが、そのいっぽう、若干の言い訳もできないことはない。すなわち、外観即内実となるのは、作者が主人公を通して出遭うのが、いつの場合も他者にほかならず、したがって、外観即内実でなければそもそものリアリズムそれ自体が成り立たなくなるというものである。この意味では、作者の自然主義的手法は、この作品においても維持されているのだが、たとえそうだとしても、さらに問題がないわけではない。というのも、『混血児の王』においては、そうした他者的な扱いが、主人公にとっては他者でないはずの家族にまで拡張されているという点である。たしかにこれは尋常ではない。あるいは、もしかしたら、作者にとっては主人公ですら他者だったと考えられないこともないが、だとし

ても、それならそれで、なにゆえ作者は、そのように極端に他者ばかり登場する物語を書いたのか、疑問は残ることになる。

8

ここに、同時代の政治が浮上する。『混血児の王』が世に出た前年の1948年という年は、南アフリカ史上、けっして忘れられることのない年号のひとつと云えるだろう。すなわち、D.F. マラン率いる国民党が、総選挙においてスマッツ率いる与党統一党を負かし、ついに政権を獲得したのである。これと同時に、アパルトヘイトの歴史もいわば公的に始まることになる。マランらは、もとより親ナチ的であったから、当然のこと、ミリンの彼らを見る目は当初から冷ややかだったが、この選挙と『混血児の王』の執筆・出版が、奇しくも相前後することは、偶然とはいえ、きわめて意味深く思える（それとも、ここにも、なんらかの相互関係があるのだろうか）。そのように思えるのは、この作品が、海外はともかく、南アフリカ国内においては熱狂的に迎えられたということ。熱狂したのは、もちろん、選挙において多く国民党を支持した者たちであり、そうした国内外における作品受容をめぐる極端な相違、それと重複する政権の交代、伝統的なイギリス寄りのリベラリズムから新興のナショナリズムへの移行等々、ミリンとのあいだには、なおも甚だしい振じれが認められるものの、これもスマッツが死に、夫フィリップが世を去るに到って（ちなみにふたりは俗にいう「おしどり夫婦」だった）、少しずつ解体されてゆく。ミリンとマランの国民党とのあいだには、反黒人、反混血という点で、もともと目にみえない強い結びつきがあったのだが、作者が孤独のうちに老齢を迎え、それと同時に、そんな作者を慰めるように国内における支持が（まさに国民党政権に対するそれと軌を一にして）尋常でなく高まったことにより、それら潜在的関係が、自ずと前面に浮上してくることになった。文字どおりのクライマックス（作家サラ・ガートルード・ミリンにとっても、そして、政治家D.F.マランにとっても）というわけである。

マランといえば、知る人ぞ知る、南アフリカ政治史における悪人中の悪人だが、いうまでもなく、マランにはマランなりの言い分があった。その言い分は、最初のごく少数者のそれだったが、数十年をかけて膨張してゆき、ついには政権を得るまでになるわけだが、そうした動きの、つねに中心にいたマランの伝記を辿れば、じっさい、アフリカーナ・ナショナリズムがいかに成長していったか、その全貌を窺い知ることができるほどである。その実体は、悪戦苦闘の連続であるが、その意味では、みる者にある種の感動を与えずにはおかないような類のものであることだけは、公平を期すためにも、ここで付け加えておかなければならないだろう。

いずれにしろ、重要なのは、以上のような結果として、ほぼすべての知的サークルとミリンが袂を分かつことになったということである。そして、意地の張り合いではないが、両者の溝は取り返しのつかないほど深まってゆく。そのとき、彼女の詩学＝自然主義的手法はどうなったのだろうか。それを最後にみてゆきたいと思う。

9

いまや、否応もなく知的に孤絶した恰好のサラ・ガートルード・ミリンだったが、そんな彼女が、じつに久々小説の筆を執り、出来上がったのが16番目の小説『魔法の鳥』である。

1962年、マランはすでに世を去っていたが（1954年死去）、その跡は、ストレイダム、フルウールトと着実に受け継がれ、1961年にはついに南アフリカは共和国となって、つねに目の上のたん瘤だったイギリスの支配を排除するという、起源を辿ればグレート・トレック（あるいは、それ以前）にまで遡る、文字どおり100年越しの悲願を叶えていた。『魔法の鳥』というのは、なにより、そのような国内的な背景のもと執筆・発表された作品なのである。

内容をみれば、ひと言で云って、なんともグロテスクな作品である。黒人のチビサと白人のジョン、ふたりを軸に物語は展開する。前者は、北ローデシアの片隅のマンタティランドのリーダーとなるべくオックスフォードで学んだ若者であり、後者は、ブッシュマンを研究する人類学者の息子で、父親と同様人類学の道を歩むべくイギリスで学んだのち家族のいるマンタティランドに帰ってくる。帰国の際に飛行機で偶然一緒になったふたりは、その後付き合いを始めるのだが、やがてこれがとんでもない事件へと発展してゆく。時まさにアフリカにあった植民地が、雨後の竹の子よろしく次々と独立を果たしつつあった時期に相当し、チビサのマンタティランドもその仲間入りをしようとしている。ところが、チビサにはそうした新興国を若きリーダーとして支えてゆく自信もなければ、おそらくはその能力もなく、思惑どおりイギリスからそのために必要な支持が得られるかどうか深刻な疑心暗鬼に陥り、結果、事件の端緒が形成されることになる。

きっかけは、独立したアフリカ諸国歴訪の旅に招待されたことだった。そのうち、とりわけケニアを訪問した際の経験が、チビサを大きく変えてしまう。部族の長の息子に生まれた彼は、見込まれて小さいころよりイギリス流の教育を受けたのち、イギリス本国にも10年間留学して、いわばイギリス的とアフリカの狭間に立たされていたのだが、それがケニア訪問を機に、後者のほうへと決定的にぶれてゆく。ケニアでいったい何があったのか。チビサがジョンに話して聞かせる。すなわち、ケニアでマウ・マウの儀式に参加し、「生きている男の目を抉り、溜まった汁を飲んだ」というのである。犠牲となった男は白人で、ジョンと同様、青い目をしてきた。以来、その目に、顔に、取り憑かれてしまった。チビサはそのように告白する。そののち、チビサはジョンに握手を求めるが、ジョンはそれを拒み、チビサはジョンの顔面を殴る。そして、この直後、チビサはふたたびケニアへと旅立ってゆく。

疑心暗鬼に苛まれるチビサは、それから逃れようとして、コンゴの呪術師ゴゴ（この先祖がタイトルにある「魔法の鳥」である）に頼る。ある強力な儀式を行ない、それにより救われようというのだが、これには生贄が捧げられる。すなわち、大人ふたりと子どもふたりの生贄が、生きたまま火にかけられる。それをジョンに目撃される。ジョンは、ゴゴを撃ち殺す。混乱のなか、ゴゴの仲間の復讐を怖れたチビサに助けられ、ジョンはチビサの家に匿われる。

ここまでで、物語の半分以上がすでに経過しているが、残りの展開はむしろ素早い。ジョンは、かねてより調査をしたがっていた南アフリカのタウング（ここで最初の猿人の化石が発見された）へと去り、チビサは、自らの「魂を救うため」と称して、ジョンの妹アリソンに結婚を迫る。ジョンのため、（ここでも自身を生贄に捧げるかのように）チビサと結婚したアリソンだったが、その後の妊娠には耐えられず、それがもとで瀕死の事故に遭遇する。報せを聞いたジョンは帰国し、チビサと対面し、チビサは、アフリカ的方法ですべてを清算すべく、ジョンの目のまゝで焼身自殺してみせる。

10

物語がグロテスクに終始するのは、なによりチビサの所為である。あるいは、彼を巻き込むアフリカ独立の機運と云うべきか。それがなければ、チビサは、自身の弱みを露わにする必要もなく、事件はなにひとつとして起こりはしなかつたらうから。これについての作者の言い分は、疑問の余地がないほど明白である。すなわち、独立などと分不相応なことを考えるから、そんなふうには傍迷惑なことをしでかし自滅するような結果になるのだと。これは、より直接的には、アフリカのほうほうで現実に進行中の独立騒ぎを指してもいる。もっといえば、それゆえにこそ、南アフリカにおいて実施されているアパルトヘイトには意味がある。そんなふうにも云いたいのだろうが、そうした言い分の当否はさておき、めだつのは、露骨すぎるほどの解かり易さである。もともと、アンビギュアスなどという弱腰の言葉とは無縁のミリンだったが、それにしても、ここでの有り様はあまりにもあからさまである。じっさい、これほどなにもかも透けてみえるといったようなことは以前にはけっしてなかったことである。だが、先にも述べたように、夫の死を以て彼女が最終的に軛から解き放たれたからには、こうでなければかえって奇異しい。彼女には、もはやリベラリズムの窮屈な仮面を被る必要などさらさらない。誰にも遠慮せず、云いたいことを云いたいように云うだけのことである。だとしたら、この作品だけは、それまでの作品とは根本的に違っていることになるが、では、その違いとは、さらに具体的にいえば、どのようなものとみえるだろうか。

もっとも大きな相違は、たとえば今回取り上げた『主来る』や『混血児の王』と比べてみて明らかであるように、『魔法の鳥』という作品がそれらとは異なり、少しも過去に取材していないということである。単純には違いないが、それだけに決定的な意味を持ち得るような相違である。なにより、過去に取材するというやり方は、彼女の詩学＝自然主義的手法という点からすれば、必須のものではなかったのか。すなわち、彼女の詩学とは、過去に取材してこそ機能し得る体のもものではなかったのか。だとしたら、これは、まさに豹変と云ってもよいような変わりようである。ある意味、それほど夫フィリップの存在が彼女にとって大きいものだったということにもなるのだろうが、彼女自身どこまで事の重大さを自覚していたか示唆する部分が、ほかでもない、物語のなかにみつけれられる。問題の箇所とは、アリソンがチビサの家に匿われているジョンに会った際、ふたりが口にする次の会話に仮託された嘆きである。すなわち、

‘…… Now, Allison, do go home. You can tell the others what I've told you. Only don't do anything.’

‘You say they are bound to find out and then it might be as he says but we mustn't do anything. I'm going to the Commissioner.’

‘Don't,’ said John.

‘This is-it's not real.’

‘Things all over Africa are not real any more,’ said John.

‘What are you afraid of?’ she said, her mind also on what she, for herself, was afraid of, and that things in Africa were indeed not real any more.

‘I can't say. Only please do nothing. I ask you. Please.’ (pp.167-8)

繰り返すまでもなく、作者と登場人物とは同時代人であり、したがって、後者の感慨はそのまま前者の嘆きに通じる。「もはやアフリカに、リアルなものなどなにひとつ存在しない」。にわかには信じ難いことが、いまやそこらじゅうで生じつつあるという苦い現実認識を裏返しに述べた言葉だが、同時にそれは、物語それ自体が作者にとってリアルでなくなっているという嘆きとも重なる。思い出してもらいたいが、それまでなら自身の作品に対して「リアルでない」などといった批判をどこから浴びようが、びくともしなかった彼女である。それがここでは、自ら悲鳴を上げている。「なにもするな」というのは、そもそも、彼女の詩学のモットーではなかったか。いうまでもなく、そうした羽目に陥ったのは、なにより過去に取材するのを止めたからにはほかならない。それゆえにか、作者はまともにもなく過去に対して強い懺悔を示す。もっとも解かり易いのは、まえにも触れた、ジョンにとってのタウングだが、うえに引用した会話から少し先に進んだところで、ジョンは熱を込めて次のように云っている。

His eyes lit up.

‘I’d love to go to the Taungs, the place of the Lion and the treasure house of South Africa. Not the gold or diamond mines, but the Mines of Man. On my word of honour, Allison, I’d love to go there.’ (p.169)

ジョン親子がそろって人類学に従事することも、あるいは、父親が特に力を入れて太古の民ブッシュマンを研究するのも、はたまた、チビサが自身尊敬を寄せるリヴィングストンら昔の探検家や宣教師の残した記録に読み耽るのも、それらから作者の抱く過去への憧憬の翳を感じ取ることは、少しも不可能ではないだろう。

そんなふうにはミリンは過去から離れ、肝心の詩学を変質させてゆく。結果、物語（アフリカ）に対してそれをリアルと思えなくなるところまでいってしまう。とって、それゆえ作品それ自体のレベルが低下したとは云えない。その事実を次にみて、全体のまとめに進むことにしよう。

11

グロテスクという物語の基調がチビサによって定められたのと裏腹に、作品に深みを与えているのも、誰よりチビサにはほかならない。アフリカ的とイギリス的、その狭間に占める彼の立場がそれを可能にする。そうした立場に対して作者が下す判決は、情け容赦もなく悲観的なものだが、それとはまったく無関係に、チビサは自身のグロテスクさ加減を人前に曝すことによって、アフリカの抱える困難さそれ自体をある意味象徴し得ているからである。情けないほど弱い自身の立場ゆえに、チビサは、「可能な限り残忍になることを通じてのみ真の力を獲得できる」というふうには誤解するまで追い詰められるのだが、じっさい、この誤解は、白人がアフリカ人に対して持っている認識とも重複する。ジョンの父親スミス氏は、妻を相手にそれを代弁して云う。

‘You remind me of Clark’s words. He says that beneath the veneer of civilization is the barbarian, and beneath the barbarian the savage, and beneath that a solid core of animal

appetite. Here in Africa we are going straight down from civilization to animal appetite.’ (p. 112)

ここまでくれば、作品の持つグロテスクさと、チビサの間抜けさやアフリカの後進性とのあいだに、もはやなんら関係は認められない。それが証拠に、作者は非情な判決をチビサに対して下しつつも、いっぽうにおいては、問題の持つ普遍性と深刻さを暗示するかのようになり、ときにフロイトに触れ、あるいは、シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』や旧約聖書に出てくる預言者たちに言及せざるを得なくなるのである。

こうしたことは、ほかの作品においては、一切みられなかったことである。それまでのミリンの手法は、多くは狭いリアリズムを基本とし、むしろそれに徹し切ることによって意味を生み出してゆくといった類のものだったが、それが、この作品においては、すでに起こったことではなく、起こり得るだろうことを対象として作品化しなければならなくなった結果として、うえて述べたような手法の変質と引き換えに、思ってもみない広さや深さを伴う視野を得るに到ったというわけである。齢すでに70を超し、いまさら新境地を拓いたところで、なにがどうなるものでもないのはもちろんだが、いずれにしろ、作者本人にはそこまでの自覚はなかったものと思われる。というのも、サラ・ガートルード・ミリンという作家は、最初から、いわゆる芸術的には無頓着な作家であり、ここにおいても、ほかの作品におけるのと同様、書かねばならぬと無自覚的に信じることを、読者の目により本当らしくみえるような形に直すということだけに骨を折る、ただそれだけが、作家としての自身の仕事であると思込んでいたに違いないからである。だとしたら、それら視野の広さや深さといった結果は、作者にすれば、望ましき副産物ですらなかったに違いない。先に問題点として指摘しておいた、ミリンと知的サークルとの断絶が意味するのも、こうした無頓着さをその実体として指している。いずれにしろ、傍目には後退でしかないそれが、作者にすれば、大いなる前進を意味し、同時にその逆もまた真実であるというような結構、それはじつにひねくれているが、ミリン独特のユニークな構えであると云えるだろう。

12

最後に、oralityの観点から、少しだけ述べておきたいと思う。

なにより彼女は、終始一貫、それに忠実だった。その理由は、ひとえに彼女が自分の目にみえるもの以外信じようとしなかったという単純きわまりない事実にある。そして、この事実こそ、小説家としての手法の、あるいは、それにより形作られた諸作品の出発点であった。とするなら、oralityと彼女の小説とは、つねに無理なくびたりと重なっていたことになる。この蜜月が現実にも数十年も続いたことを思えば、じっさい驚くほかないが、なら、その源泉とはいったいどこに由来しているのだろうか。ひとつには、本稿の議論からも明らかなように、政治である。サラ・ガートルード・ミリンという作家は、終始一貫 orality に忠実だったのと同様に、生涯を通して政治的な人間だったが、両者が重なるのは、いわゆる世論というその一点であり、いわば、それこそすべての源泉だったのである。といて、誰に流されるわけでもない。いつの世においても世論ほど気紛れなものはないが、そうとは知りつつ、それでいて、それとの関係だけはけっして断とうとしない。ミリンは、そのように頑固で矛盾した作家だったのである。

本来歴史小説を得意としたサラ・ガートルード・ミリンだったが、それにしたところで、いわゆる正史の言いなりになっていたわけではない。それどころか、彼女が取材したのは、いわゆる正史から外れたものばかりである。じっさい、今回取り上げた3作のうちふたつ、すなわち、『主來る』と『混血児の王』の2作品は、揃ってその原理に則っている。歴史にはけっして無縁ではないが、堂々と大手を振って正史に名前の挙がる人物も事件もそれらには出てこない。といって、なんら奇を衒っているわけではない。それでこそ真の歴史は記述できると信じているだけの話である。と同時に、この信念こそが、彼女のリアリズムの裏付けともなっており、そのように考えてくると、サラ・ガートルード・ミリンという作家とアパルトヘイトを主導したアフリカーナとは、不思議に似た者同士にみえてくる。というのも、グレート・トレックに始まり、ボーア戦争を経ながら、民族意識を高めていったアフリカーナたちが、独立のため特に力を入れたのが、言語（アフリカーンス）の確立と、もうひとつ、歴史の記述にほかならなかったからである。その歴史とは、最初から正史だったわけではなく、その地位をイギリス人の手から奪い取ることによってはじめて成り立つ体のものであった。すなわち、それは、サラ・ガートルード・ミリンがこれこそ真の歴史と見做そうとした彼女なりの正史と同種のものであったのである。そうした両者が、長い刻を経て、最後に合流するというのは、まさに因縁というほかないが、とするなら、その際インターフェイスとなったアパルトヘイトを指して、ただの悪法の体系とのみ云い切ることにはできないだろう。それへと到る道程の密度を思えば、じっさい、ミリンが肩入れしたのも無理ないようにもみえてくる。じつに、彼女にとってのアパルトヘイトとは、生き別れになっていた異母兄弟のようなものだったのである。

くわえて、いずれの歴史においても、これから正史になろうとする以上、そのもともとの成り立ちは文字ではなく、声であったに違いない。そのような oral literature と政治とのあいだの親和性については、第1回目のクネネ以降つねに意識してきたことであるが、ふり返れば、広いアフリカをぐるぐる廻りながら、こうしてミリンとともに出発点である南アフリカに舞い戻ったとも云える。南アフリカにおいては、彼女以後、今度はアパルトヘイトの陣営が黒人の側から激しい反撃を受けることになるが、その際にも、oral literature は強力な武器として機能してみせる。そのように oral literature の観点からアパルトヘイトを論じるというのは、じつに興味深いテーマだが、いずれ稿を替え論じることができればよいと思っている。

* 本稿において使用したテキストは下記のとおりである。

Sarah Gertrude Millin, *The Coming of the Lord* (Horace Liveright, 1928)

-----, *King of the Bastards* (Heinemann, 1950)

-----, *The Wizard Bird* (Heinemann, 1962)